コスモ石油 エコカード基金

ずっと地球で暮らそう。

2008 2007年度コスモ石油エコカード基金活動報告書　第6期:2007年4月1日～2008年3月31日

【南太平洋諸国支援プロジェクト(ツバル)】

気候変動の影響を真っ先に受ける島国で 地球環境問題の適応策と緩和策を実践しています。

マングローブの苗を運ぶ中学生

稼働中の給水車

ツバルで生活する人たちは国外に移民しなくてはならないほど地球温暖化の被害に直面しており、国土の至る所でその被害を視認できます。

南太平洋のツバルは、9つの珊瑚島からなる島しょ国です。人口1万人ほどの人たちが、美しく透明な海を眺望できる島々に暮らしています。日本からみると楽園のような国ですが、ツバルに暮らす人たちは国外に移住するなど地球温暖化の被害に直面しています。ツバルなど南太平洋島しょ国が直面している温暖化の被害は、温暖化それ自体を止めること以外に抜本的解決の手段がなく、コスモ石油エコカード基金は、温暖化の影響を少しでも軽減するための支援活動を展開してきました。2004年度にツバルで活動を開始し、2008年度で5年目になります。2004年度の現地調査後、マングローブの植樹や給水車の提供などの「適応策」を実施し、2008年度からは、ごみ処理に関するワークショップ開催などの「緩和策」を実践する予定です。地球環境問題、とりわけ温暖化問題は国際機関や一市民に至るまで国際社会が広く関心を共有し、ライフスタイルの変革や技術開発など広範な分野で一歩一歩地道な活動を進めることが必要不可欠です。

※島しょ国:大小様々な島から成る国

「ずっと地球で暮らそう。」プロジェクト

コスモ石油エコカード基金は、2002年4月に「地球のために何かをしたい」というお客様の思いと、コスモ石油の思いがひとつになって生まれました。
2002年4月に発行した『コスモ・ザ・カード・ハウス「エコ」』と、2006年6月に発行した『コスモ・ザ・カード・オーパス「エコ」』の会員（以下「エコ会員」）の皆さまからの年間500円の寄付金と、コスモ石油のカード売上の一定割合をもとに、当基金は地球環境貢献活動「ずっと地球で暮らそう。」プロジェクトを展開しています。

message

2008年7月に日本を含む8ヶ国の首脳とEU委員長参加の首脳会議「北海道洞爺湖サミット」が開催されました。主要テーマのひとつに「環境・気候変動」がありました。このことは、地球環境問題が世界の重要な課題であることを示しております。

この「環境・気候変動」にも共通するメッセージ「ずっと地球で暮らそう。」という合言葉は、私たちの暮らす美しく自然豊かな地球が遠い将来も存続してほしいとの願いを込めたキャッチフレーズです。2002年4月にコスモ石油エコカード基金を創設し、地球環境貢献活動「ずっと地球で暮らそう。」プロジェクトを開始しましたが、現在では「地球環境のために何かをしたい」という86,579名（2008年6月末現在）の会員の皆さまのご支援をいただき、2008年度に7年目を迎えることができました。これも、ひとえに会員の皆さまのご支援や励ましのおかげであり、心から御礼を申し上げます。

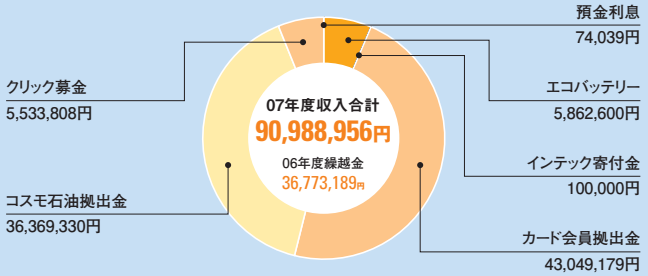
私たちは、地球温暖化防止をテーマに、途上国が直面している深刻な環境問題への取り組みと、日本国内の将来を担う子どもたちに対する環境教育を続けて参りました。リオ・デ・ジャネイロで開催された地球サミット（1992年）やヨハネスブルク・サミット（2002年）などでも国際的に合意されている「共通だが差異ある責任」を私たちの問題として真摯に受け止め、「ずっと地球で暮らそう。」プロジェクトを展開しています。

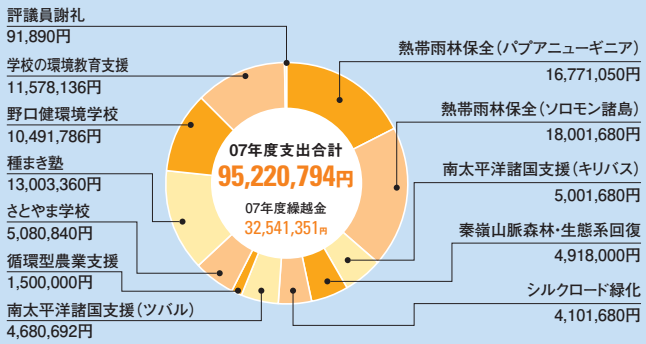
2008年度は、参加型プログラムの展開や地球温暖化防止プロジェクトの新規公募などのステークホルダーとのコミュニケーション強化を中心に、地球環境貢献活動を継続して参ります。

最後に「環境・気候変動」への取り組みは、解決まで長い道のりが予想されます。私たちは「ずっと地球で暮らそう。」を合言葉に、これからも会員の皆さまと地球環境保全への想いを共有し、今できることを実践して参ります。
今後も、温かいご支援とご協力をお願い申し上げます。

コスモ石油エコカード基金
理事長 近藤 直正

収支報告



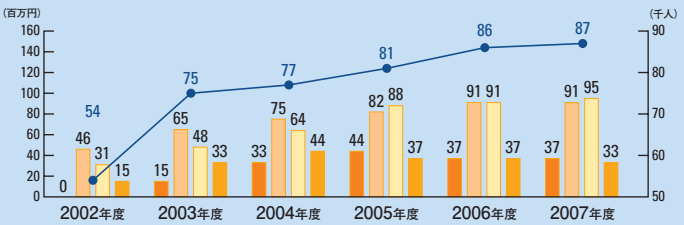


基金の収支に関するレビュー結果

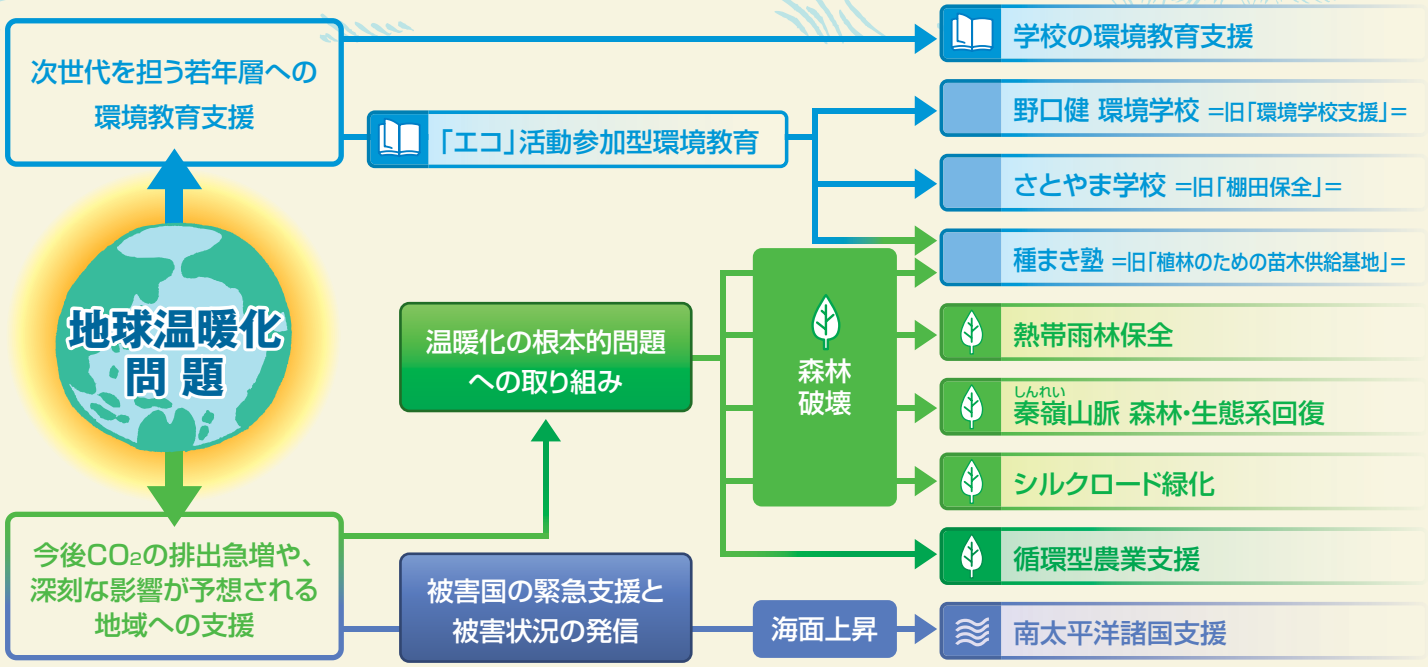
2008年4月8日
公認会計士 加藤 俊也

2007年度（2007年4月1日から2008年3月31日まで）の収入と支出について、基金が作成された収支報告に間違いがないかどうかを、基金の外部にいて利害関係のない独立の立場から、会計の専門家としてレビューを行いました。その結果、我が国において一般に公正妥当と考えられる収支計算の基準に準拠して、問題になる点は発見されませんでした。レビューは、監査と異なり、質問や財務情報の分析的手続き、主要な証憑と会計記録の照合などの限定的な手続きの実施によるものです。

資金規模と会員数の推移



project 2008



持続可能な社会の実現

【プロジェクトのコンセプト】

「ずっと地球で暮らそう。」プロジェクトは、エコ会員の皆さまやNGO/NPO、海外の現地政府などの様々なパートナーの協力のもと、化石燃料である石油と関わりの深い環境問題「地球温暖化の防止」への取り組みをテーマに、「持続可能な社会」づくりをめざす活動を進めています。「ずっと地球で暮らそう。」の合言葉の実現に向け、①持続可能な開発支援（途上国支援）と、②次世代の育成（環境教育支援）をサブテーマに、国内外で活動を継続しています。

2007年度の活動 トピックス

OISCA International技術顧問
荏原 美知勝

パプアニューギニア（以下「PNG」）における地球温暖化の被害

私がPNG東ニューブリテン州（以下「ENB」）に着任したのは1993年3月ですが、その当時と比べると地球温暖化によると推測される次の現象が見られます。①ENBの島のドゥク・オブ・ヨークは海面上昇の被害を受け島民移住計画を作成中。②約4年前から本島のハイランド地区でマラリア発症。③全国的に降雨量が増し、土砂崩れや道路崩壊の被害が各地で発生。④昨年9月には大型サイクロン「グバ」が発生しオロ州を中心に甚大な被害をもたらした。⑤雨季乾季の予測不能なため、作物栽培計画が策定困難。小規模な被害を入れると身の回りに幾つも見られます。

プロジェクト評議会開催

2008年3月27日に、プロジェクト評議会を開催しました。プロジェクト評議会では、「ずっと地球で暮らそう。」プロジェクトや当基金の運営について、有識者3名とコスモ石油エコカード基金の役員が意見交換を致しました。そこでは、プロジェクトの活動実績と計画の紹介のほか、地球温暖化防止プロジェクトの公募・外部監査（レビュー）の導入・資金管理の外部委託などを討議しました。

コスモ・ザ・カード・オーパス「エコ」
コスモ・ザ・カード・ハウス「エコ」

コスモ・ザ・カード・オーパス「エコ」、コスモ・ザ・カード・ハウス「エコ」は、「地球のために何かしたい」という思いを実現するための、どなたでも参加できるカードです。

コスモ・ザ・カード・オーパス「エコ」、コスモ・ザ・カード・ハウス「エコ」はお客様から毎年お預かりする500円とコスモ石油からの寄付金を、環境保全活動を行うNPOや公益法人などに寄付することで、その活動をサポートしていきます。

コスモ・ザ・カード・オーパス「エコ」
コスモ・ザ・カード・ハウス「エコ」
会員の皆さまからの寄付
入会後、及び次年度以降の入会月に500円のご寄付をお預かりします

プラス

コスモ石油グループの寄付

地球環境保全をサポートする「ずっと地球で暮らそう。」プロジェクトを運営

入会のご案内はこちらから ▶

http://www.cosmo-oil.co.jp/card/eco.html

入会申込書はお近くのコスモステーションにもあります。

7 Projects

【「エコ」活動ファイル2007】

マークの凡例
地域開発
環境教育

中国

シルクロード緑化プロジェクト

砂漠の拡大が進む黄土高原の荒廃地で、地域の人たちと植林を続けています。

植林準備の一風景

植樹式の参加者たち

乾燥地域が広がる中国シルクロード上の黄土高原では、沙漠化により新たな土地が侵食されています。地域の人たちによると、以前は陝西省西安市付近から新疆ウィグル自治区まで緑が広がっていましたが、燃料材の伐採や過放牧など土地の酷使が荒廃地域の拡大につながったと言われています。私たちは、プロジェクトパートナーのNPO2050とともに、陝西省で乾燥と寒暖の差に強い沙棘(サジー)による植林活動を開始し、現在、甘粛省で植林を継続しています。

地域の子どもたちと植樹している様子

2007年度の活動

甘粛省において、2007年10月に植林ツアーを実施し、14名の会員が現地農民と共に120,000本の植林を行いました。現地の諸事情により、2006年度から繰越された30ha分につきましては、2007年11月～2008年4月にかけて90,000本の植林を完了致しました。また、現地の「中国人口福利基金会」の協力のもと、植林地域を視察し、苗木の現状や沙棘(サジー)の収穫、環境問題について協議しました。これらの課題は、2008年度に対応する予定です。

今後の活動

黄土高原で沙棘(サジー)の植林とモニタリングを実施します。2008年度は農家の人たちが中心となり、35haに105,000本の沙棘の苗木を植林します。植樹手法やデータ管理などモニタリングも継続し、植林地域の評価と、これらから見えてくる課題の解決に努めます。

中国

秦嶺(しんれい)山脈 森林・生態系回復プロジェクト

森を分断する林道跡地に植林し、絶滅危惧種の生息環境改善に取り組んでいます。

生態観測結果を発表するプロジェクトパートナー

木々を飛び移るキンシコウ

秦嶺山脈は、パンダやキンシコウ(絶滅危惧種)などの希少動物の宝庫として世界的にも有名です。しかし、20世紀後半の薪炭材の伐採により、野生動物の生息する森は荒廃し、種の絶滅が危ぶまれるようになってしまいました。このプロジェクトでは、豊かな森林と生態系の回復をめざし、環境を最も脅かしているとされる林道跡地への植林(全長194kmのうち72.5km)と、動植物の観測に取り組んでいます。

秦嶺山脈で植樹している学生たちや地域の人たち

2007年度の活動

秦嶺山脈の廃棄道路16kmに約310名が従事し12,000本の樹木を植樹しました。最近の調査によると、植林した道路に、小動物のほかにも頻繁に野生の豚やキンシコウが移動しており、マスメディアでも報道されています。フィールドワークを通じたキンシコウの生態観測や、ケンブリッジ大学など中国国内外の大学での論文発表も続けています。

今後の活動

秦嶺山脈の植林活動は、希少動物の生息地域の生態系回復が、希少動物の活発な活動につながります。今でも同山脈の北側に廃棄道路(林道跡地)が放置されており、2008年度には14kmの林道跡地に合計11,000本植林予定です。野生動物の適応状況など生態観測も継続します。

フィリピン

循環型農業支援プロジェクト

地域の循環型農業の構築に向け、キャッサバ植栽やエリ蚕養蚕を実施しています。

地機(じばた)織り

整経機を練習するトレーナー

フィリピン南西部のパラワン島は緑豊かな島であるとともに、同国の中でも最も開発の遅れた地域といわれています。その地域の農民や漁民の人たちの多くは、森林伐採や焼畑農業に従事し、生活を営んでいます。私たちは、プロジェクトパートナーのNPO2050とともに、パラワン島の首府プエルトプリンセサで、タグバライ財団の協力を得て、現地女性によるキャッサバ栽培やエリ蚕飼育を通じ、環境保全活動を展開しています。

トレーナー向けの技術指導の様子

2007年度の活動

2007年度はエリシルク技術指導者養成とトレーナーによる研修を実施しました。エリ蚕飼育・糸紡ぎ・編み物・織物などのトレーナー向け技術指導をプエルトプリンセサで計3回開催し、その他ポートバートンにおいても同様な指導をしました。また、島内3ヶ所にトレーナーを派遣し、地域の人たちにエリ蚕飼育の技術指導をしました。

今後の活動

2008年度も、同国パラワン島で、糸紡ぎ・編み物・織物などの「トレーナー向け技術指導」を実践し、その技術指導を受けたトレーナーが要請に応じて各地で技術指導を行います。また、マイクロクレジットも継続して運営します。

南太平洋諸国

南太平洋諸国支援プロジェクト

降水量の変化や海水面の上昇などの環境被害を受けている地域を支援しています。

海岸浸食防止のための石積み

南太平洋のキリバス諸島やツバルは、気候変動の影響を真っ先に受けているといわれる島しょ国です。平均海抜が数mしかない両国では、潮位が上昇すると住宅に浸水したり井戸に海水が流入したりするなど、脅威は地域社会の人たちに否応なく差し迫っています。その結果、自給自足の循環型社会であった地域の食料自給率が低下し、海外からの輸入品が氾濫し、ゴミが島内に散乱するようになっています。気候変動が地域社会の人たちの生活に影響を及ぼしています。

キリバス共和国

2007年度の活動

2007年度はキリバス共和国のアナナウ地区とナニカイ地区に、4,243本のマングローブを植樹しました。マングローブの保全や再生も継続しています。2005～2007年度の3年間で28,528本を植樹。(残存率約40%)残存率は2005年9月から2007年9月にかけて、約54%から84%となり、過去の経験が確実に活かされてきています。持続的な活動になるようにと、政府関係者へ自主的な植樹を働きかけ、効果も出始めています。

植樹から約3年間経過したマングローブ

今後の活動

2008年度はマングローブ植樹を通じ、地域住民に対して植樹活動に必要とされる適正な技術移転を行います。また、環境啓蒙映像を利用したワークショップを開催し、キリバス国内だけにとどまらず南太平洋全体の現状をわかりやすく伝え、環境意識と域間連携の醸成に努めます。

ツバル

2007年度の活動

フナフチ環礁のフナファーラ地区に、約1,640本のマングローブを植樹しました。2007年10月には植樹式を開催し、副首相など政府関係者や小学生20名がマングローブの種子を丁寧に植樹しました。また、雨水タンクの補修事業にも着手。地元の工事会社と契約し、工事管理を行い、2007年6～9月に76基のタンクを補修しました。

副首相との植樹

給水車

タンク補修

今後の活動

2008年度は、環境被害を深刻に受けるツバルのフナファーラ地区に、2,000本を目標にマングローブを植樹します。さらに、廃棄物の啓発事業を展開し、専門家を招聘したワークショップを開催します。廃棄物の環境被害を地域の人たちに伝え、それら被害の拡散防止に努めます。

植樹する中学生

フナファーラ地区で植樹式を開催

日本

種まき塾

"ココロと大地にタネを蒔く"をスローガンに、自然林の回復活動を通し、環境教育に取り組んでいます。

物事の始まりであり、「循環」の象徴と言える「タネ」に注目し、自然循環する森林づくりと、環境教育に取り組んでいます。山からタネや実生を採取し、これを苗畑で育て、地域で植林する方々に提供します。苗木育成や植林活動を通した環境教育プログラムも実施しています。

播種体験するエコツアー参加者

実生を採取するエコツアー参加者

苗木づくりまでの過程を熱心に指導する先生

2007年度の活動

アカエゾマツやミズナラなど約5,320本の苗木を富良野自然塾や北海道山村草木会に供給しました。2007年度現在、約36,000本の苗木を育成しており、苗畑の維持管理を徹底しています。また、富良野エコツアーなどの環境教育プログラムに、延べ563名が参加しました。

今後の活動

北海道富良野で持続可能な自然林をめざし、地域の植生にあった森林づくりを実践しています。2008年度は苗木供給5,000本を目標とし、苗場の維持管理を行います。体験学習も実施し、参加者の環境意識に訴求していきます。

日本

学校の環境教育支援プロジェクト

日本各地のNPOとともに、教育の現場、「学校」での環境教育を支援しています。

小川で自然体験する子どもたち

教育最前線である「学校」の環境教育をお手伝いすること、それがこのプロジェクトの目的です。自然体験プログラムなどのノウハウを持つ日本各地のNPOと、ノウハウや機会を探している学校とのマッチングを行い、互いの長所を生かした環境教育プログラムに取り組んでいます。また、環境教育サイト「EE kids」を活用し、環境教育のプラットフォームづくりも行っています。

2007年度の活動

自主的・自立的な環境教育の展開をめざし、全国9校に環境教育プログラムを支援しました。環境教育サイト「EE kids」は、普段授業を見られない保護者の方々からも喜ばれています。

授業での発表会

今後の活動

2008年度は13ヶ所の小中学校(北海道1校、岩手県1校、宮城県3校、埼玉県1校、東京都3校、三重県2校、鹿児島県1校、沖縄県1校)の環境教育プログラムを支援します。

バードウォッチングしている子どもたち

■ 2007年度支援校

地区	小学校	支援団体	テーマ	期間	回数
北海道	札幌市立手稲宮丘小学校	NPO法人 ねおす	都会である札幌の自然について知る	4~8月	6回
宮城県	栗原市立鶯沢小学校	くりこま高原自然学校	地域の自然と歴史の関わりについて知る	5~3月	9回
埼玉県	越谷市立大袋東小学校	自然教育研究センター	ビオトープの生き物調査	4~11月	9回
東京都	東京大学教育学部附属中等教育学校	木風舎	森林の働きを知り、地球温暖化を考え、実践につなげる	4~2月	20回
岐阜県	高山市立清見中学校	森林たくみ塾	木を使ったものづくりから森の機能と地元の文化について考える	6~10月	8回
広島県	東広島市立木谷小学校	人間科学研究所	地域の海の豊かさと歴史について知る	6~9月	3回
高知県	仁淀川町立名野川小学校	黒潮実感センター	山と海のつながり	6~7月	2回
熊本県	菊池郡大津町立大津小学校	コミネット協会	水から環境を考える	6~3月	3回
鹿児島県	蒲生町立西浦小学校	NPO法人くすの木自然館	河川環境教育	5~11月	5回

04年度:5校、05年度:6校、06年度:10校

日本

「エコ」活動参加型環境教育プロジェクト 野口健 環境学校

環境に対し自ら行動できる『環境メッセンジャー』の育成を支援しています。

伝言ゲームを楽しむ野口健さんと環境学校の参加者

「自分から環境に対して行動しメッセージを発信できる人"環境メッセンジャー"を育てていきたい」。そんな思いから野口健さん率いるNPOとともに「環境学校」を開催しています。環境学校では自然の美しさや楽しさを体験し、環境保全のありかたや、背景にある社会問題も学びます。

富士山でごみ拾い後の集合写真

2007年度の活動

富士山と佐渡島で環境学校を計3回、東京でメッセンジャーミーティングを1回開催しました。環境問題の最前線での体験プログラムを通じ、自分から環境に対し行動し発信できる人「環境メッセンジャー」を育成しています。2007年度は、約100名の参加者が環境学校や東京に集まりました。

開催地	日程	参加者数	メインテーマ
佐渡	7月22日～7月25日	24名	トキ放鳥の佐渡の取り組みについて
富士山	8月11日～8月14日	28名	富士山の不法投棄の現状について
富士山(家族対象)	9月15日～17日	21名	富士山の不法投棄の現状について。家族が富士山でできること、家庭でできること
東京	12月15日～16日	31名	企業の環境活動(エコプロダクツ展等)。環境メッセンジャーの輪

今後の活動

「環境メッセンジャー」を全国に育成します。2008年度は、富士山(3回)、佐渡、東京の3ヶ所で合計5回の環境学校を開催します。参加者からも費用の一部を頂き、自立的な活動をめざします。

日本

さとやま学校

日本の美しい景観の残る棚田で、荒廃しつつある棚田の再生・保全と環境学習の提供を行っています。

日本の環境問題についての出張授業

日本国内では人口減少や高齢化に伴い、里山の環境が荒廃しつつあります。その影響を受ける長野県飯綱町で、棚田や里山の再生・保全と、次世代を担う子どもたちへの教育提供を実践しています。

地域の環境問題を講義する地域の人たち

インストラクターとプロジェクトパートナー

2007年度の活動

耕作放棄地30a(雑穀・そば栽培)や棚田20a(紫米)を活用し、環境保全を実践しました。実践を通じて環境を伝えられる環境教育リーダーの育成をめざし、44名を受け入れました。また、関東圏の小中学生計791名を対象に、農業・食・環境を考える出張授業を提供してきました。

今後の活動

引き続き、里山の再生・保全の活動と、小中学生への環境・食農教育の提供を行います。双方が持続的に成り立つ仕組み作りとして、里山保全活動内で生産した農産物の都市部での販売を開始し、環境学習の定型教材化を目指します。

パプアニューギニア

熱帯雨林保全プロジェクト

熱帯雨林の保全をめざし、焼畑農業から定地での循環型有機農業への移行を支援しています。

圃地を整備するパーマカルチャーセンターの学生たち

パプアニューギニアやソロモン諸島は、南太平洋の中でも日本と関わりの深い島しょ国です。自然環境の豊かな地域ですが、人口急増や急速な近代化に伴い、食糧生産の増加や現金収入の必要性が高まっています。そのため、商業伐採や焼畑農業の拡大により、自然の再生スピードを超える熱帯雨林の消失が進んでいます。熱帯雨林の保全と、貧困に起因する諸問題の根本的な原因解消を目的とし、焼畑農業から定地での循環型有機農業への移行を支援しています。

水稲栽培を実践する研修施設「エコテックセンター」の学生たち

2007年度の活動

主にモデル研修農場の充実化と定地型有機農業の普及に取り組みました。研修農場では、施設内のカカオを利用したチョコレート製造、有機農業等の専門書購入(現在300冊の蔵書)、農業指導者20名の国家登録などを通じ、将来的な自立運営の実現に向け着実に歩んでいます。ココボ自然環境公園は、土地の確保が遅れ、2008年度に開設予定となりました。

今後の活動

循環型有機農業の普及を実践します。自立運営をめざしたモデル研修農場の参考図書充実化や技術者育成、有機農業普及のための刊務所の農業指導や水田肥沃化などを展開します。2008年度もココボ自然環境公園開所に向け、井戸掘りや人工水路の設置などを準備します。

ソロモン諸島

2007年度の活動

循環型有機農業の人材育成施設「パーマカルチャーセンター(PCC)」では2007年度30名の研修生が卒業し、PCCインストラクター1名が日本での研修を修了しました。また小規模産業育成施設「ソロモンオーガニックセンター(SOC)」ではドライフルーツなどの商品開発や、PCC卒業生や地域住民から買い上げた蜂蜜の日本販売も開始しました。

パーマカルチャーセンターの卒業生一同

今後の活動

引き続きPCCとSOCの機能充実を図りつつ、プロジェクトの全国的な広がりを目指して精米小屋を中心とした拠点を設置します。また活動をより多くの方々に理解して頂くため、積極的な広報活動を実施します。なお昨年4月に勃発したソロモン震災に対しては、今年度も継続し食料自給体制基盤強化に努めます。

ぽかし(有機肥料)の調合

提供した精米機

中国 China
富良野
札幌
宮城
佐渡
長野県
埼玉
岐阜
東京
富士山
広島
高知
熊本
鹿児島
フィリピン Philippines
パプアニューギニア Papua New Guinea
ソロモン諸島 Solomon Islands
キリバス共和国 Republic of Kiribati
ツバル Tuvalu

Information

23,915,467回のクリック

皆さまのクリック数だけ、
コスモ石油がコスモ石油エコカード基金に寄付します。

「ずっと地球で暮らそう。」プロジェクトをひとつ選んでクリックすると、自動的にご本人に代わってコスモ石油がそのプロジェクトに1円を寄付する仕組みです。2008年7月現在、8つのプロジェクトをご紹介しています。ご支援したいプロジェクトをクリックし、国内外の環境貢献活動にご協力ください。2007年度は5,533,808円のクリック数がありました。

※クリックはお一人様1日1回のみ有効です。
※クリックされる方にお金はかかりません。
※23,915,467回のクリック数は、2008年3月31日までの累計数です。

URL http://www2.cosmo-oil.co.jp/kankyo/charity/index.html

いま、私たちにできること

南米の先住民に伝わる物語『ハチドリのひとしずく』を巡る兄と妹のストーリーです。

学校の宿題の感想文を書くために『ハチドリのひとしずく』を教室で読んでいる妹「真里」。その姿を見たサッカー少年の兄「智」が真里に近寄り、物語は始まります。そして、この物語の主人公で先生役の「ハチドリ」と一緒に地球温暖化問題を学んでいきます。北海道富良野市で苗木づくりをしている「種まき塾」、中国の黄土高原で植林している「シルクロード緑化プロジェクト」、南太平洋の島しょ国ツバルで海に植林などしている「南太平洋諸国支援プロジェクト(ツバル)」の活動も紹介されます。

URL http://www.cosmo-oil.co.jp/netmovie/index.html

(会員の皆さまへ)キリバス政府から

感謝状が届きました

このたび、マングローブの植樹活動に対し、キリバス政府から感謝状が届きました。

2003年度にキリバス共和国で環境被害の緩和策を実践し始め、2008年度で6年目を迎えました。これまで、雨水貯蔵タンクの設置、天然塩生産用ポリトレーの提供、海水移動用ポンプ一式の設置、マングローブ植林と技術移転などを実施してきましたが、これらの成果は、プロジェクトパートナーのひとりであり、強力なプロジェクトの支援者でもある「キリバス政府」関係者の率先した行動力が背景にあるからです。その「キリバス政府」の大統領のアノテ・トンさんから、コスモ・ザ・カード「エコ」会員の皆さまへの感謝状をお預かりしましたので、ご報告いたします。

コスモ・ザ・カード「エコ」会員の皆さまへ

地球温暖化は今日の国際社会にとって最重要課題の一つであり、着実に上昇する海面は、独自の文化と生活様式を持つ我がキリバス共和国と国民の存続に脅威を与えています。

そのため、私たちは地球温暖化の影響に対処する適応策や緩和策を、大いに歓迎致します。対策の一例である、海岸線沿いにマングローブを植樹する活動は、潮の満ち引きの影響を和らげております。私はこの場を借りて、キリバス政府と国民を代表してISME(国際マングローブ生態系協会)がキリバス共和国で継続的に行っているマングローブ植樹プログラムに対し、深く感謝致します。またコスモ石油と会員の皆さまから、たゆまない努力とご支援を頂いていることに対し、重ねてお礼申し上げます。

皆さまにキリバス共和国でお会いできることを楽しみにしております。

Anote Tong

アノテ・トン
キリバス共和国 大統領

『コスモ石油エコカード基金』の環境貢献活動について

よりよい地球環境に向けて、何かやりたい、活動にかかわりたいと考える人々。その気持ちが、エコカード基金の機能を通して有効で確実な形になっていくのは素晴らしいことです。環境の課題は、現実をよく見て判断し、優先順位を決めて進めていく必要があります。評議会に出された資料は、詳細で誠実です。不明な点は、CSR、財務、法務の視点から検証され、対策が講じられています。評議員として高く評価ができると感じたのは、担当者が現場に足を運び、関わる人同士が向き合って状況をよく把握していることです。これまでに蓄積されてきた経験と人脈は大きく、基金の資産にもなっているといえるでしょう。

活動に参加した方々の体験レポートはホームページでも見ることができますが、実態はさまざまなメディアやツールを通して広く知られることが大切です。各所に伝われば、新たな展開の可能性も生まれます。基金の活動がさらに具体的に見えてくれば、会員の満足度は高まり、形はどうであれ、もっと関わりを持ちたいというモチベーションにつながるのではないかと思います。希望の種を蒔いて育てていく過程が、すべての会員の方に広がることをまずは期待致します。意識の共有は、次の展開を生みだし、継続させる大きなパワーになるでしょう。

田中　里沙
宣伝会議編集室長
(コスモ石油エコカード基金プロジェクト評議会評議員)

コスモ石油のカードに関するお問い合わせ先

コスモ・ザ・カード・ハウス「エコ」	0120-987-622	携帯電話専用 03-4330-1660	月～土曜・祝日／9:15～17:30、日曜日／10:00～17:30
コスモ・ザ・カード・オーパス「エコ」	北日本 022-771-1500 中部 059-353-2100	東京 043-296-6200 大阪 06-4863-0100	年中無休　9:00～21:00

制作
コスモ石油株式会社
〒105-8528　東京都港区芝浦一丁目1番1号東芝ビル
TEL　03-3798-3134
http://www.cosmo-oil.co.jp/

Waterless Printing Naturally
ミックス品 FSC認証林及び管理された森林からの製品グループです www.fsc.org Cert no. SGS-COC-001466 © 1996 Forest Stewardship Council
PRINTED WITH SOYINK

この報告書は、コスモ石油提供で作成し、コスモ石油エコカード基金に寄せられた会員の皆さまの寄付金は使用しておりません。